

専用マウスの製作

1 相談内容

相談者は対象者の妹です。「対象者(兄)が視線入力装置を試したいと言うので、試すことができないだろうか。」と相談がありました。自宅での視線入力装置のデモが可能と伝え、対象者の身体状況を詳しくお聞きすると「話すことが何とかできる。」とのことでした。まず訪問して対象者に体験していただくことにしました。

2 対象者プロフィール

60代男性、身体障害者手帳1級、要介護5です。脳性麻痺です。早口になると聞き取りにくいこともありますが、落ち着いていると聞き取りができ、対話はスムーズでした。家族と暮らしています。

3 対応

視線入力装置のデモを行いました。対象者は話すことだけでなく左右足部の底背屈ができ、首の左右の動きもあったので、スイッチでのマウス操作代行が可能と判断しました。

専用マウスとして、オリジナル USB 入力デバイスを作るための小型モジュール(REVIVE micro、株式会社BitTradeOne)を使い、専用ソフトウェア(簡単設定ツール)によってマウスカーソルの方向や速度を割り付けました。またカベナシ(デスクトップの上下左右でマウスカーソルを循環できるフリーソフト)もインストールし、操作を設定しました。



マウス設置(ベッド柵)の様子



本人操作(左親指)の様子

4 結果

訪問看護ステーションの理学療法士から「足部での操作持続性が十分ではないので、わずかに動く対象者の手指で行いたい。」との提案がありました。そこで対象者が右手にスペックスイッチ(パシフィックサプライ㈱)、左手にプラケーススイッチ(㈱TY 企画)を持ち、それらを専用マウスに接続して上下左右へマウスカーソルを動かし、決定は顎のポイントタッチスイッチ(パシフィックサプライ㈱)で操作する方法を採用しました。

5 予算

3,500 円程度